

戦争記憶に肉迫した「取材の鬼」

——山崎豊子「戦争三部作」の形成とその時代背景

李 瑞華

要旨：日本社会派小説を代表する作家である山崎豊子(1924-2013)は1970年代から約20年間にわたる綿密な取材により、収集した豊富な関係者資料に基づき、戦争題材の「戦争三部作」を執筆し、日本国内外の問題をかかえた激動する時代に衝撃を与えた。この「戦争三部作」の創作方法、あるいは仕掛け方をめぐっては、異なる見方があるようである。しかし、戦争体験があったからこそ、「取材の鬼」である山崎は現実の事件や人間をモデルにし、徹底的な取材を通して時代を揺さぶるような仕掛け型の「戦争三部作」を創作したのである。この時期の山崎は、日本の社会派小説家というよりはむしろ、国際的社会派小説家といえるのではないか。それに加え、山崎が作家の井上靖氏の薫陶を受けたことが知られているが、実はもう一人の助言者である富士正晴という人物が山崎作品にとって非常に重要な存在であったといえよう。本稿では先行研究を踏まえ、「戦争三部作」における山崎の仕掛け方の諸相を検証し、執筆当時の時代背景をも明らかにしたい。

キーワード：山崎豊子 「戦争三部作」 戦争記憶 取材経験 戦争反省

はじめに

2019年3月23日-24日、山崎豊子(1924-2013)の同名小説が原作のスペシャルドラマ、『二つの祖国』がテレビ東京系で放映された。この作品は、1984年にNHKで大河ドラマ化された時、「祖国という言葉は暗くて固いから、一般視聴者になじみやすい」『山河燃ゆ』のタイトルに変更され、内容も原作と異なる部分が多かった。しかし、この度は日本人が移民としてアメリカへと海を渡ってから150年を経る節目、さらに前回の映像化より35年後の2019(令和1)年、テレビ東京開局五五周年記念ドラマとして放映された。そして『不毛地帯』は、2009(平成21)年に30年ぶりに映像化され、フジテレビ開局50周年記念ドラマとして放映された。『大地の子』は、1990(平成2)年に文藝春秋読者賞、1991(平成3)年に菊池寛賞を受賞し、1995(平成7)年にNHKと中国中央電視台の合作でドラマ化され、モンテカルロ国際テレビ祭最優秀作品賞を受賞した。この三部作とは、山崎が1970年代から約20年間にわたる綿密な取材により、収集した膨大な関係者資料に基づき執筆した戦争題材を扱った「戦争三部作」⁽¹⁾なのである。

⁽¹⁾ 『不毛地帯』(1976年-78年単行本)、『二つの祖国』(1983年単行本)、『大地の子』(1991年単行本)。

しかしながら、山崎の初期の作品は伝統的な船場商家などの「大阪もの」に密着した小説⁽²⁾が多い。その後、山崎の小説の舞台は大阪、ひいては日本からロシア、アメリカ、中国などへと広がり、戦争の非人間性および大国間の衝突などの国際的な問題を深く掘り下げた「戦争三部作」を創作したのである。では、なぜ山崎はちょうど1970年代からこの「戦争三部作」の執筆に取りかかったのか。なぜ山崎は日本の社会派作家から国際的社会派小説家に変容したのか。本稿では以上の問いをめぐって、「戦争三部作」における山崎の仕掛け方の諸相を検証し、その執筆に取りかかった当時の時代背景を明らかにしたい。

一 「血の出るような切れ味」を持つ『不毛地帯』

「戦争三部作」の第一作としての『不毛地帯』は1973(昭和48)年8月12日から1978(昭和53)年8月27日にかけて「サンデー毎日」に連載され、戦後のシベリア抑留と高度経済成長期の商社を舞台にしてベストセラーとなった長編小説である。この小説は「サンデー毎日」で連載中の1976(昭和51)年に「ロッキード事件」⁽³⁾が明るみに出たり、1978(昭和53)年に「ダグラス・グラマン事件」⁽⁴⁾が発覚したり、当時の近い将来を先取りしていたとも言えよう。それは山崎の「分析や計算などで予見出来るもの」ではなく、綿密な取材力と正確な情報把握・分析の賜である。山崎は取材中に、当時の衆議院決算委員会議事録を読んだ時、「質疑応答の中から政治的腐敗の臭いが漂ってくるように思え、これはいつか大きな問題に発展するのだと感じた」のである(山崎2009:40)。

そして、1973(昭和48)年から1978(昭和53)年までの5年間にわたり、山崎の取材の行動範囲はシベリアをはじめとして、イラン、サウジアラビア、クウェート、インドネシア、インド、アメリカ、シンガポールなど十カ国へと及んだ。取材を始めた時、山崎は「一人でハバロフスクからイルクーツクを経てモスクワに辿り着くシベリア横断」をしたり、「抑留体験者の一人ひとりを訪ねて取材した」のである(山崎2009:11-25)。このように山崎は取材で得た事実を厳しい目をもって判別し、仕事のこととなると一切妥協せず、相手の都合も考えず、傍若無人なところもあって、「取材の鬼」と呼ばれていた。小説家の松本清張(1909-1992)は山崎の全集に寄せて、「取材を徹底するのはリアリズムを重んずるからである。人の話や本の上での想像だけでは承

(2) 1957年、昆布屋を題材としたデビュー作『暖簾』を始め、大阪・船場は多くの山崎作品の舞台となった。1958年、吉本興業を創業した吉本せいをモデルにして大阪人の知恵と才覚を描いた『花のれん』により第三回直木賞を受賞した。1963年より連載を始め、大学病院の権力構造と腐敗の現実を描いた鋭い社会性で話題を呼び、映画化されたほか、数回に渡りテレビドラマ化された『白い巨塔』すら、大阪大学医学部をモデルとしたもので、「大阪もの」が作品への味付けとなっている。

(3) ロッキード事件とは、アメリカの航空機製造大手のロッキード社による主に同社の旅客機の受注をめぐって、1976年2月に明るみに出た世界的な大規模汚職事件。田中角栄元首相が同年7月に逮捕された。

(4) ダグラス・グラマン事件とは1978年2月に発覚した日米・戦闘機売買に関する汚職事件。

知らない作家である」と高く評価している（新潮社山崎プロジェクト室 2015:274-281）。

戦後日本経済の復興は加速した。さらに、朝鮮特需(1950-1953)もあって、ジリ貧だった日本経済は、1956(昭和31)年の『経済白書』に「もはや戦後ではない」と記されるまでの復興を遂げている。そして1960年代初頭に「所得倍增計画」が発表されると、日本は高度経済成長へと邁進し始めた。とくに、1966(昭和41)年から始まる「いざなぎ景気」に日本全体が沸く中、鉄鋼業界にも再び繁栄が訪れる。この時期は自動車産業が急速に成長した時期でもあり、世界トップクラスの性能を持つ日本車は海外でも脚光を浴び、年々輸出を伸ばしていった。この復興を牽引し、高度成長を実現するために、それを支える基本的な要因となったのが「1940年体制」⁽⁵⁾である。そして、「現在に至るまで、この体制は変わらなかった」(野口2010:155)。山崎はこのような強固な制度を拠り所としていた高度成長期を背景に、その裏の構造を掴み、小説の中で、戦闘機導入やアメリカの自動車産業との業務提携及び中東の石油開発などをめぐって物語を展開させていくのである。

山崎の主人公設定は戦時中の元大本営参謀で、戦後シベリアに11年の長期抑留を強いられ、帰国後に巨大な商社に入社し、そこで大出世を遂げて高度成長期の日本経済を牽引する壱岐正という人物である。この人物のモデルについて、山崎自身は明言していないが、保阪正康氏は、『不毛地帯』の主人公は実際には複数の人間を総合して造形したものであるのに、同作の影響によって瀬島龍三だけがモデルであるとのイメージが世間に定着していった」と指摘している(保阪2011:46-48)。また、大澤真幸氏も、『不毛地帯』の壱岐正は、瀬島龍三の人生からインスピレーションを得て造型された」と述べている(大澤2017:82)。

この壱岐正のモデルとされる瀬島龍三(1911-2007)⁽⁶⁾とはどのような人物なのであろうか。彼は当然ながら実在の人物であり、軍人かつ大本営の参謀まで務め、シベリア長期抑留の経験者でもあった。瀬島は帰国後伊藤忠商事に入社し、『不毛地帯』が出版された頃には副社長にまで出世していた。後に同社長に上り詰めた瀬島は、田中角栄や児玉誉士夫に並ぶ昭和史業界のビッグネームとなった。

山崎は小説の中で戦争体験や戦後処理についてのシーンを設ける。即ち、シベリア十一年の抑留生活を通して、壱岐は戦前および戦中の「軍人の道徳は戦に勝つこと」を否定し、「戦争放棄を是とする気持」がある(山崎1983:457)。憲法第九条をめぐる論争は今も続いている。そして、「朔風会」というシベリア長期抑留者の会が小説の終始を貫いている。「朔風会」結成の目的は、「シベリアに眠っている遺骨が帰って来るまでは真の帰還はないとして、遺骨の帰還促進と

⁽⁵⁾ 1940年体制とは、1930年代のはじめから、太平洋戦争という総力戦が軍部と官僚の一部によって強力に推進された戦時経済体制、即ち「戦時体制」。

⁽⁶⁾ 瀬島龍三は日本の陸軍軍人であり、実業家である。大本営作戦参謀などを歴任し、最終階級は陸軍中佐であった。戦後は伊藤忠商事の会長となり、中曽根康弘元首相の顧問など多くの要職に就任し、政治経済界に大きな影響力を持ち、「昭和の参謀」と呼ばれた。

遺族の援助、会員の相互扶助」を行うことである（山崎 1983:89）。つまり、この「朔風会」は政府の戦後処理行政機関ではなく、民間団体である。そして、「朔風会」による慰霊碑を建てること、「戦友の霊を弔う」と同時に、「悲惨な犠牲の上に築き上げられた歴史の教訓を永遠に記録することになり」、それが「生きて祖国に還り着いた者の為すべきこと」である（山崎 2009:437）。小説の終章で、壱岐は近畿商事を退社し、朔風会の会長を引き受け、慰霊碑の建立と遺骨の収集を果たすために、第三の人生を過ごし始めたというシーンがある。この戦没者の遺骨収集の問題は現在に至ってもなお残っている。

「戦争とそれに続く苛酷なシベリア体験もかなり曖昧な形で戦後三十年の年月の中に消え去ろうとしているよう」だが、「シベリアの収容所における日本人の抑留生活は、戦後の日本人の歴史のなかで、眼を覆って通り過ぎることのできない歴史的事実で、この辺のことは永久に消してはならないものだ」と山崎は考えていたのである。さらに、山崎は「シベリア抑留は、ソ連の国家ぐるみの捕虜虐待」であり、「20万人に及ぶ死亡、行方不明の事実」を考える時、「広島への原爆投下」とともに、「私たち日本人は告発者の立場であることを忘れてはならないだろう」と強く訴えている（山崎 2009:15）。

上述したように、主人公のシベリア抑留生活を通して、山崎はこの苛酷なシベリア体験という歴史的事実と、戦後の日本社会の裏に見え隠れしている様々な社会問題を人々に直視させ、現実に起こった事件や実在の人物などをモデルにした、時代を揺さぶるような仕掛け型の大河小説を得意とする小説家としての地位を確立したといえよう。その仕掛け方において、『不毛地帯』ほど「血の出るような切れ味」を持った作品は他にないだろう。

二 「かつて見られないような壮大なスケール」の『二つの祖国』

「戦争三部作」のうち、唯一の悲劇的な結末で終わった『二つの祖国』は、準備に二年間かかり、1980（昭和55）年から1983（昭和58）年にかけて『週刊新潮』に連載され、およそ五年間にわたり完成された長編小説である。日米開戦と同時に、アメリカに在住していた日系人は砂漠の奥地の強制キャンプに収容され、そこから戦場へ駆り出された日系二世が、アメリカと父祖の国である日本という二つの祖国の間で揺れ動いた苦悩を山崎は丹念に描き、個人にとって祖国とは何かを問いかけたのである。文芸評論家の権田萬治(1936-)氏は、『二つの祖国』は戦時中のアメリカと南洋の戦場、そして原爆投下によって敗戦を迎えた日本での戦争裁判と、歴史的にも地理的にも山崎豊子のこれまでの作品にかつて見られない壮大なスケールの作品と言える」と高く評価している（権田 2005:536）。

「日米間の戦争が始まったときアメリカに留学していた」鶴見俊輔(1922-2015)は、「移民法違反の容疑で FBI に逮捕され、収容所に入れられた」が、アメリカの勝利を確信し、戦争が終わったときに敗者の側にいるべきだと考えて戦時中に日本への帰国を決断した、というエピソードがある。「鶴見は、敗者の側に立とうとして、アメリカから日本に戻ったが、そのことでかえ

って、敗者としての体験を検出しにくくしたかもしれない」。しかし、『二つの祖国』の主人公天羽賢治の場合は逆である。彼は、勝者の側（アメリカ）にとどまった。そのことでかえって、彼は、敗北ということの過酷な意味を、まともに、まったく緩衝のためのフィルターなしに受け止めざるをえなくなった」のである（大澤 2017:142-145）。

山崎はハワイ大学と首都ワシントンの国立公文書館で基礎資料の収集と平行して「三百人近い」一世や二世の人たちに会い、彼らの生々しい体験談を聞いた。その中には両親や姉弟、あるいは妻子を「収容所から解放してもらいたい」ために、「ヨーロッパ戦線」に出ることでアメリカへの「忠誠の血の証し」をたてた人々もいた。その一方で、アメリカへの「忠誠を拒否して司法収容所やツールレーク隔離収容所へ入れられた」人々もいる。彼らの体験を通して、日本とアメリカの戦争が、「在米日系人に残した爪跡」の「想像を遥かにこえて苛烈」であったことを山崎は痛感したのである（2005:522）。

しかし、日系一世や二世への取材は山崎を揺さぶるが、三世の学生たちへの取材は山崎を揺さぶるどころか、むしろ激怒の感情さえ抱かせた。なぜなら、その中の数人が「おじいちゃま（一世）は血と汗と涙で日系人社会を築き上げたので尊敬するけど、パパ（二世）は尊敬しない。なぜって、強制収容所に羊のごとくおとなしく引かれていったのは情けないから」と言ったからである（山崎 2009:64-65）。彼らは父たちがなぜ抗議運動をやらなかったのかと批判的であった。彼らは、銃を突きつけられながらキャンプに収容され、生と死が日々隣合わせだった当時の状況を想像できなかった。彼ら三世たちの批判に対し、山崎はその歴史的事実を伝えなければいけないという使命感を持って、『二つの祖国』を書き続けた。この小説は米国内の強制収容所、戦場となった太平洋の島々、広島原爆投下及び東京裁判という四つの題材から成っている。

強制収容所の部分について、山崎は取材中、「ハワイ大学の図書館で真珠湾攻撃と強制収容所関係の第一次資料」を漁ったが、ワシントンの国立公文書館での「資料は膨大過ぎ、資料ボックス 45 万 3000 立方メートルの量」があり、「収容所関係だけに限っても相当量」であった。そして、この小説が連載中の 1982 年末から「アメリカで戦時中の強制収容所へ入った日本人に対する戦時賠償が議会で取り上げられ、公聴会にも付されたが、国家による謝罪は当時、まだ明確にされていなかった」のである（山崎 2012:257）。その後の 1988（昭和 63）年 8 月 10 日、「1988 年市民的自由法」が成立し、米国政府は日系人に謝罪すると共に、一人二万ドルの補償を行なった（岡部 1991:2-3）。しかし、『二つの祖国』の連載時期においても、日系人が戦争中に入れられていたアメリカの強制収容所の存在については、当時の日本ではほとんど知られていなかったのである。いくつかその実態に迫る本も出版されたが、多くの日本人がそれを知るところとなったのは、山崎の「克明な取材の成果に基づき、こと細かに描き出され」ていたこの小説によるところが大きいのではないだろうか。

アメリカで日系人関係の資料を調べ、「ミネソタの米陸軍情報部の日本語学校」の跡を訪ねた時、「語学兵」（情報部言語学兵）という存在は「第二次大戦における米軍の原子爆弾に次ぐ秘密

兵器だ」と山崎は捉え、小説の中で「語学兵」になった賢治の活動についてのシーンを設けた。そして、戦争中はもとより、戦後も1973（昭和48）年まで国防総省は機密事項にしていたが、公開されるや、太平洋戦争における「語学兵」一名は、歩兵一個中隊に匹敵し、戦争終結を二年早めたと評価されたのである。さらに、山崎は、「語学兵」になった賢治と、日本に留学していて日本の軍隊に徴兵された弟の忠とが、フィリピンの戦場で「相まみえ、相撃つ場面」を設定した。それは現実に起こったことであり、山崎はサンフランシスコ在住のノブ・ヨシムラ氏を見つけ出して掴んだ事実であった。ヨシムラは「ニューギニア戦線」にいる時、毎朝、「もし今日、日本軍にいる弟と出会ったら」と思わぬ日はなく、地獄の苦しみであった。もし出会ったら、「弟になら撃たれてやろうと心に決めました……」とヨシムラは慟哭した。このような一語は現実に敵、味方に引き裂かれた「二世の兄弟ならではの言葉で、創作できない言葉だ」と山崎は述べている（2005:487）。

広島原爆投下について、山崎は「全米原爆被爆者会」を取材し、原爆投下の時、戦時中に交換船で日本へ帰らざるをえなかった二世の女主人公椰子を被爆させたシーンを設定した。

戦後編では日本へ進駐した賢治を、東京裁判のモニターとして活躍させることにした。モニターとは、通訳の言葉をチェックする「誤訳訂正官」であり、現実に四人の優秀な二世のモニターが東京裁判の舞台裏で活躍していた。一語、一句に被告の生命がかかっているモニターの仕事をやり遂げた四人であるが、裁判終了後、一人は帰国して病死、一人は精神病院入院、一人は自殺、最後の一人は消息不明であった。山崎はこの消息不明の「ラニー宮本」氏を数ヶ月かけて探し出し、モニターの作業内容を克明に聞いてから、天羽賢治の人間像を書ききったのである。そして、山崎によると、法廷速記録に沿って、「ランゲージ・モニターとつながる視点」で、審理の問題点だけを抽出した小説的構築に力を注いだ。山崎は、「日本文と英文の速記録」をつき合わせ、「専門家の意見を聞き」たり、ワシントンの「国立公文書館のIPS（国際検察団）調書」にも目を通したのである（2005:525-526）。

山崎（2009:60）は『二つの祖国』を書き終わった後、次のように述べた。

私たちの世代は、男性は学徒出陣で死んで行き、女子学生は弾磨きに動員されたのであった。私たちの青春を奪った戦争に対する怨念は、戦後もずっと残っていた。戦後ずっと、咽喉に小骨のようにひっかかっていたものが、二千二百枚（原稿用紙）の『二つの祖国』を書き終えて、ようやく私の戦後を締めくくることができたような思いがする。

前述した権田が述べているように、徹底した現場の取材により、リアルに描写されたこの小説は、「歴史的にも地理的にもかつて見られない壮大なスケールの作品」と言える。主人公の悲劇的な運命を通して、戦争が多くの日米日系人にもたらした「大いなる悲惨と苦悩を見事に浮き彫り」にして、内なる二つの祖国に身を引き裂かれるような苦悩を味わいながら、「雄図空しく強制収容所や前線で」死んでいった多くの日系人たちに対する山崎の「熱い鎮魂の祈りがこ

められているに違いない」。そして、一つの祖国しか持ちようのない現代の日本人に対しても、改めて「祖国とは一体何か。国を愛するとはどういうことを意味するのか。」という重たい問いを突きつけずにはおかないのである。戦争は人間にとって最大の「人生のドラマ」だが、これを再び繰り返すような「人類の愚行を避けなければならない」という訴えは、この小説の四つの限りなく大きい主題の中で所所に描き出されている（山崎 2005:537）。

三 「命を懸け」て書かれた『大地の子』

「今後の中国研究、中国理解の裾野を拡げた」（山崎 1995:289）と言われた『大地の子』は、1945（昭和 20）年から 1985（昭和 60）年までの中国を舞台とした中国残留孤児を主人公にした物語であり、取材に 1984（昭和 59）年から 1991（平成 3）年までの八年間を費し、「命を懸けて」書き上げたものである。

『大地の子』の構想が生まれてからの中国取材は、始めに触れたように取材の壁は高く険しかった。山崎は旧満州、新疆ウイグル自治区、内蒙古を含む中国各地で綿密な取材を重ねた。その際、山崎は、本来、外国人の立ち入り禁止とされている場所でも現地の担当者の協力を得て出入りすることができ、取材を行うことが可能になった。それは当時、中国共産党の総書記であった胡耀邦(1915-1989)⁽⁷⁾の許可を得ていたからであった。山崎は執筆の際に中国での取材にあたり胡氏の全面的な協力を得たほか、三度も中南海の官邸に招かれている。「私は中国の作家とも、普通は一度しか会わない。外国の作家に三度会ったのは、あなたが初めてです」とは胡氏の言葉である（野上 2015:162-163）。それは当時、一作家に過ぎない立場の者にとって極めて異例のことだったのではないだろうか。

1984（昭和 59）年 11 月 29 日に、胡氏は山崎との最初の会見にあたって、事前に「一人の中国人と日本人として会おう」というメッセージを山崎に伝えていた。会見中、「中国を美しく書いてくれなくてもよい。中国の欠点も、暗い影も書いて結構。ただ、それが真実であるならば」と告げた。その翌年の 1985（昭和 60）年 12 月 8 日、胡氏との二回目の会見で山崎は次のように質問した。「日本の侵略をそこまで責めるのならば、イギリスの犯した阿片戦争は、まさに民族の滅亡に繋がる重大な侵略ではないですか。なぜそのことは一言もおっしゃらずに、いつまでも日本だけを責めるのですか」（山崎 1999:210-211）。胡氏は「中日戦争からはまだ 40 年しか経っていないが、阿片戦争からは百年経っている」と切り返した。そして、胡氏は「中国は八カ国侵略（義和団事件・1900 年 6 月、英・米・仏・伊・独・露・日・オーストリアの侵略）を受けてから 85 年経って、ようやくその記憶が薄れて来たが、抗日運動からは 45 年、中日戦争からはまだ 40 年しか経っていない、あと 40 年ぐらい経ってからは、淡々とした気持ちになれないことを考えてほしい」と言われた（山崎 1999:105-109）。胡氏との会談が山崎にどれほどの影響があっ

⁽⁷⁾ 胡耀邦は、中華人民共和国の政治家である。第三代中国共産党中央委員会主席・初代中国共産党中央委員会総書記である。

たかはわからないが、少なくともこの8年間、山崎は生き残った歴史の証人として、まさに石の筆で岩に刻みつけるような思いでこの作品を書いてきた。

山崎は、取材に膨大な時間と手間をかけることでよく知られているが、その忍耐強さと丹念さは、胡氏の考えを真摯に受けとめようとする姿勢が根底にあるのではないか。つまり、中国への取材の扉が、胡耀邦総書記の英断で開かれなければ、『大地の子』という作品は成し遂げられなかった。そして、胡氏とのこの会見は、作品に多大な影響を与えたはずである。その成果は、『大地の子』という作品において、戦争が過去のものではなく、現在もなおそこにある重い事実-戦争の爪跡として残されているのである。山崎(新潮社山崎プロジェクト室 2015:182-187)は第五二回文藝春秋読者賞受賞式のスピーチで次のように述べている。

私はこれまでいろいろな取材を致しましたが、泣きながら取材したのは初めてです。『大地の子』だけは私は命を懸けて書いてまいりました。

「泣きながら取材」とは中国で行われた戦争孤児たちへの取材である。以下は、山崎(1999:34-45)が取材日記に記録した張永海という戦争孤児の経験である。

1984年10月24日

当時、私は九歳で、ソ満国境に近い開拓団の小学校三年生で、秋の収穫(満州の収穫は日本より一ヵ月早い)を手伝っている時、突然、非常サイレンが鳴り、馬に乗った開拓団の連絡員が「ソ連軍が国境を越えて攻めて来た、七日分の食糧と身の廻り品を持って本部前へ集まれ」と、各集落に命令しました。

(中略)誰も8月15日に、日本が降伏したことを知らず、ソ連軍を怖れて逃げ、夜露に濡れながらの野宿を重ねているうちに、次々と死者が増えました。(中略)父と姉と私の三人でできるだけ道端より奥へ運び、木の枝を沢山かぶせて合掌し、泣く暇もなく、父が妹を背負いました。(中略)

小学校の時は、小日本鬼子といじめられ、そのため養父母は2回も引っ越して、黒龍江省の大学へ入ってからは、私が日本人だと知る人はなかったのですが、文化大革命が始まると、私が日本人だということを上部機関に密告したり、陰湿な迫害を受けました。(中略)それでも私は、養父母の恩愛を思い、また党と国家に対する忠誠心から、日本の肉親を探そうなどとは思いませんでした。

ところが、1982(昭和57)年、日本からの肉親探しの中に私の名前があり、中国紅十字会経由で、日本の父が私を探していることを知りました。(中略)養父母に相談すると、ともかく、肉親対面の一時帰国をして来るがよいと、云ってくれました。(中略)

どんなに気を遣ってくれても、樹の洞に妹を下ろし、くくり紐から自由になって小さな手をあげて喜んだ妹を、母がしていた背負い紐で縊り殺した父の姿は、臉に焼きついて離

れません。おそらく生涯、あの時の怖しさは、私の胸から消えないでしょう。どうしても日本の父を、父とすることができませんでした。お前は私の一人息子だからと、永住帰国をすすめてましたが、私の心は固く閉ざされ、中国の養父母のもとに帰ってきました。そして私が思ったことは、私は二つの祖国を持っている、私の民族、血統は日本、忠誠を誓うのは中国だということです。

上述したように、『大地の子』に登場する主人公陸一心は張永海のような戦争孤児3人のモデルから作られた人物である。さらに、山崎は、320人ほどの孤児たちとあって、日本人孤児の女性が実際に暮らす農家に住み込み、昼は畑に入り、持ったこともない鋤や鍬を振るった。その家には水道もなく、洗面器一杯の水で家族五人が顔を洗っていたそうである。そして、旧満州へは都合四回、取材に訪れた。宝山製鉄所の建設現場では作業員と一緒に泊まり込み、内蒙古や寧夏回族自治区で、「労働改造所」という名の刑務所で囚人にインタビューすることもできたのである。52年間の長きにわたって秘書を務めた野上孝子氏は、「どの作品に対しても、先生は大変な情熱を傾け、命を懸けて取り組んでいました。創作活動中の姿は本当に壮絶そのものでした」と述べている(野上2015:158-163)。

確かに、現代中国を題材に書くことは、当時の中国では取材の「堅固な壁」があり、中国語のできない山崎にとっては「不可能な計画で無謀」であり、「壮大なる失敗作」になる可能性すらあると「中国通」である中国文学研究者竹内実氏に指摘されている。しかし、山崎は情熱と不屈の精神を持って、胡氏から得た取材における全面的な協力のもとで、「命を懸けて」この作品を「壮大なる成功作」にすることができたと言えよう(山崎1999:16;267-268)。さらに、山崎と胡氏は、国家や制度などの「堅い壁」と「様々なシステム」を越え、それぞれの感性や価値観を尊重し、人と人との繋がりを大切に作る「人間性」⁽⁸⁾を有している、という共通点があったからこそ、歴史の真実を再現する臨場感にあふれるこの作品は「壮大なる成功作」となったのではないだろうか。

四 社会派から「国際派」へー「戦争三部作」の時代背景

山崎は現実に起こった事件や実在の人間をモデルにし、徹底的な取材を通して上述した「時代を揺さぶるような仕掛け型」の「戦争三部作」を創作した。では、なぜ、山崎は48歳から64歳まで約20年間にわたって戦争を題材にしたこの三部作を書き続けたのか。国際的社会派作家へ変容したきっかけは何か。それには心理的条件と物理的条件があったと考えられる。

まずは、心理的条件について、山崎自身の戦争体験と、戦争経験者である富士正晴(1913-1987)⁽⁹⁾との密接な対話、という2点が挙げられる。20歳から21歳にかけて書き記していた山

(8) 「人間性」について、陶(2012:6)を参照されたい。

(9) 富士正晴(本名・富士正明)は小説家・詩人。徳島県出身。野間宏らと出会い、竹内勝太郎に師事。詩の同人誌『三人』を創刊。1947年には島尾敏雄、林士馬らと同人誌『VIKING』を創刊し、

崎の日記が大阪府堺市の旧宅で見つかった。山崎の日記は他に残されておらず、デビュー前に書かれたものが見つかるのも初めてである。太平洋戦争末期の1945年1月1日から3月27日までの記録で、大阪大空襲の体験を主として「私の胸から一生忘れられない焼印だ。」「この無惨、惨状、戦争は絶対いけないものだ。人類の不幸は戦争から始まるものだ。ああ平和、これこそ今、全世界人類の希求するものだ。」と書いていた(新潮社山崎プロジェクト室 2015:42-56)。さらに、山崎の大学生時代において、2年しか大学に行っていないにもかかわらず年限が来れば卒業証書が出されたのである。「学徒動員令で男子学生は全部特攻隊として片道切符で死んでいきました。私たち女子学生は軍需工場へ行って銃の弾磨きや軍衣の縫製をさせられました。粗食と過労、また米軍の空襲で死んでいった友がいる中で、私は生き残りました。生き残った者として何をなすべきか」(山崎 2009:107-108)という思いは種として山崎の胸に生き続けている。しかし、この種を育てる土はまだ成熟していない。

大学を卒業した後、毎日新聞大阪本社に勤めていた山崎は、同社で上司だった作家の井上靖(1907-1991)氏の薫陶を受けたことで知られている。しかし、井上が1951(昭和26)年5月に退社して(井上 2000:732)関西を離れたため、山崎は地元大阪の先輩作家、「竹林の隠者」と称された富士に助言を求めた。山崎没後初めてメディアに掲載された山崎から富士正晴宛への「書簡」とは、1950(昭和25)年から1968(昭和43)年まで、山崎のデビュー前後や人気作家になった頃、作品を創作中の山崎から富士に送られた手紙と葉書等である。「御批評」、「ご教導」、「ご意見」などという言葉が所々に見られ、助言者として富士の存在がいかに大きかったかがうかがえる⁽¹⁰⁾。ここで特に注目すべきことは富士の戦争体験と戦争文学である。

1944(昭和19)年3月3日、32歳だった富士は徳島の西部三十三部隊に陸軍二等兵として入隊し、同じ年の5月5日には、中支派遣歩兵四十師団第二三五連隊に転属となった。一兵卒として、富士は中国の湖南・広東から桂林を含む華中・華南の山々や平野をひたすら転々とした。敵軍の飛行場を破壊して歩くのが作戦上の主な任務であった。1945(昭和20)年8月16日、上等兵となっていた富士は、江西省南昌市三江口で日本の敗戦を知り、1946(昭和21)年5月、上海、鹿児島経由で大阪に復員した(茨木市立中央図書館併設・富士正晴記念館 2002:30-33)。戦後になって、最初の戦争小説「ひとこま」を1950(昭和25)年に発表して以来、富士は20年近くかかって戦争体験を作品化し、一九篇発表した。そのほとんどは、虚構性の少ない、富士自身の経験の「記録」といったものである。富士は戦争小説を書く動機を、「加害者として結構中国人を殺し、いじめしている兵隊たちが何やら被害者めいて物悲しく感じたことの方が多い。しかし、それを悲しいものと表現するような気分でもなく、ただ目をみはって、事実を事実とし

多くの後輩作家を育てた。上方落語界をはじめとする関西芸能の研究でも知られる。晩年まで大阪府茨木市内の竹林に住していたことから、竹林の隠者と称された。1987年、死去。没後1988年に岩波書店から『富士正晴作品集』(全五巻)が刊行され、1992年には茨木市に富士正晴記念館が開館した。

⁽¹⁰⁾ 書簡の内容について、李(2019:503-537)を参照されたい。

てながめ、その見たところをはっきり書き残しておこうというだけのことで、戦争小説を書いて来たようだ」（「戦争小説-私の場合」）と述べている。それに対し、『大地の子』の中国取材の時、胡耀邦との最初の会見で、山崎は「小説はスローガンではありません。私は中日友好のために小説を書く」と報道されていますが、最初からそれを前提にして書くことはできない。書いたものが結果的に中日友好のためになればと思っています」と述べている（山崎 1999:18）。戦争体験は異なったが、戦争に対する客観的な視点と徹底した事実を追求する姿勢がこの二人の共通点だと思われる。

戦争にのぞんで富士は、必ず生きて帰ること、戦時強姦をしないこと、（その他）、大いに飯を食うこと、ビンタを喰ってでも無理な仕事を避けること、という「鉄の規則」を自らに課して実行することになる。富士の戦争小説は華々しさと重苦しく深刻ぶるといったこと、一兵卒としての富士は戦争や軍隊に批判的な視点を持つことで、一個人としてのささやかな戦争への抵抗をしたといえるのではないだろうか。さらには民衆という無抵抗な存在の怒りや悲哀、苦悩を、富士は小説を通して二重三重に写し取った。逆に、山崎は生きている時代の人物や膨大な資料を徹底的に身を粉にして調べた後、芸術的に小説を創作した。そして、山崎の「戦争三部作」では激しい戦争場面も少なかった。戦争そのものについての書簡はまだ見つかっていないが、戦争体験の衝撃はこの二人の記憶と思想の中に深く刻み込まれ、終生消えることはなかったであろう。山崎が富士の戦争に対する視点と創作方法から深い影響を受けたこと、及び二人の間で戦争についての密接な対話があったことは容易に推測できる。

次は、物理的な条件について、「戦争の世紀」といわれた 20 世紀の激動した内外情勢は、山崎に大きな衝撃を与えたと考えられる。具体的な内容は以下の通りである。

この百年の間、「未曾有の死傷者を出した二つの世界戦争」をはじめ、数えきれないほどの局地戦争が戦われ、また冷戦という、表面的には大国間の戦争がなかった時にも、地球上からすべての生命を抹殺してしまうような兵器が開発されていったこと、さらには米ソ冷戦の終結直後に湾岸戦争が勃発したこと等を想起すると、「現代史上戦争の占める圧倒的な地位を否定できない」のである（入江 2000:217）。日本は、20 世紀に二度の世界大戦、未曾有の二度の原爆投下と敗戦による占領、平和憲法の制定と講和・賠償の一部実施、および戦後の長期平和と高度経済成長を経験した。山崎の「戦争三部作」は、このような 20 世紀の日本が経験したことだけではなく、露・米・中という大国間の衝突などの国際的な問題まで捉えられ、激動の時代と時代に翻弄される人びとの状態を「三部作」のそれぞれの主人公（老岐正、天羽賢治、陸一心）を通し、最もよく表現されている。

1960 年代に入り、アメリカによるベトナム戦争介入とその泥沼化は、日本人の反戦意識を大いに刺激していた。1965（昭和 40）年 4 月 24 日に「ベトナムに平和を 市民文化団体連合」の名で発足したベ平連運動⁽¹¹⁾は日本全国に活動が広がった反戦運動である。アメリカ軍による北

(11) ベトナムに平和を!市民連合(略称:ベ平連)は、日本のベトナム戦争反戦及び反米団体。運動団体としての規約や会員名簿はなく、何らかの形で平和運動に参加した人々や団体を「ベ平連」と呼ん

爆は1965年に開始され、1975(昭和50)年に終結するまで十年間に及び、それ以前と以後とは、世界情勢は根本的に異なったといえよう。フルシチョフ(1894-1971)の失脚により国際関係は新しい緊張をもたらした。東西陣営の分極化傾向が強まると同時に、第三世界の存在が次第にクローズ・アップされてきた。しかし、その間に米ソ両陣営の内部矛盾が噴出したのをはじめ、アジア、アフリカ、中近東情勢も大きく変わった。1972(昭和47)年にはニクソン訪中による米中接近が見られ、続いて田中首相の訪中と日中国交の正常化が実現した。その後の中国は1978(昭和53)年末から改革開放に大きくかじを切り、経済発展路線をひた走っていた。1967(昭和42)年6月の中東戦争以来、六年にわたって「戦争でも平和でもない状態」を維持してきた中東では、1973(昭和48)年10月に戦闘が再開され、アラブの石油戦略がその効果をあらわし、世界経済を揺がせた。当時の日本では、使用エネルギーの四分之三を石油に依存し、その大部分が中東からの輸入であったため、経済成長に邁進してきた日本にとってはもっとも厳しい石油情勢であった。

そして、経済の高度成長が生んだ様々な問題が目立ち、日本の社会自体が根底から揺れを起こし始めたのだ。繁栄の60年代の後に続く70年代は、日本の産業構造の空洞化を否応無しに露呈させたが、その一方で経済的寡頭支配が進み、ビッグビジネスへの経済権力の集中化が顕著となり、それに伴う問題が様々な形で論議されるようになった。多国籍企業の形態から「ロッキード事件」に至るまで、日本は多くの問題に直面している。それらは企業の論理がすべてに優先することを物語ると同時に、政界、官界、財界の結びつき一癒着一がいかなるものであるかを端的に示している(家永1976:4-7)。

さらに、山崎年譜を調べてみると、1970年代から「戦争三部作」を執筆中の約20年間、山崎は取材のために頻繁に世界を飛び回ったことがわかる。しかし、第二次世界大戦の終結から20年近く、日本人は一般観光客として自由に海外を旅行できなかった。1945年9月、連合国最高司令官総司令部(GHQ)の占領下におかれた日本では、すべての海外渡航が厳しく管理されていた。1952(昭和27)年に占領が終了すると、今度は日本政府が、日本人の海外渡航を制限した。戦争で疲弊した国力を再生するため、貴重な外貨を国外へ持ち出すことを規制したのである。そのため、望むままにパスポートを取得して自由に海外を旅行することは、ごく一部の例外を除けば不可能な状態が長く続いた。ようやく日本人の観光目的の海外渡航が自由化になったのは1964(昭和39)年7月のことであった(山口2010:29-30)。とりわけベトナム戦争に際して大型輸送機のボーイング七四七に代表されるジャンボ・ジェット機が開発され、1970(昭和45)年に日本に就航した後、日本の海外渡航は一般的になったのである。海外渡航の自由化が実施されなければ、今日のような「戦争三部作」ができたかどうかは疑問だと思われる。言いかえれば、海外渡航の自由化が山崎の徹底した取材を一海外取材をも一可能にした。

だ。1973年1月27日に南ベトナムと北ベトナム、アメリカなどの間でパリ協定が調印され、アメリカ軍がベトナムから全面撤退したことを受け1974年1月に解散した。

おわりに

1960（昭和35）年9月19日に富士の日記の中で、「午后山崎豊子来る。週刊新潮連載の小説についての相談。一時過ぎから六時頃までいて帰る。おそろしい粘りなり。」と記録されている（李2019:536）。山崎（2005:553）自身も「新聞記者を経験したせい、取材ということはそれほど億劫ではないのです。むしろ書齋に籠りつきになると、小説の現実感が乏しくなるような気がして不安になります」と述べている。この「おそろしい粘り」や「不安」感を持ちながら、山崎は現実起こった事件や実在の人間をモデルにし、徹底的な取材を通して三部作を創作した。この『調べた』芸術のような手法は「その他のフィクション主体の作品とは明らかに一線を画している」だけでなく、歴史教科書では取り上げられない名もなき民衆の歴史を克明に記し、人々に伝えたのではないかと考えられる。

「私を支えてきたのは『戦争』というものだったんです。」「戦争を忘れるということは恐ろしいことです。自殺と一緒にです」（山崎 2009:108）。山崎にとって戦争は極めて重いものであった。『不毛地帯』は日露、『二つの祖国』は日米、『大地の子』は日中という大国間の戦争を題材にした作品である。そして、シベリア抑留、在米日系人、中国残留孤児に関しては、山崎にとっては単純な一国の社会問題や戦争問題ではなく、より鋭い視点から見られるべき複雑な国際的問題だったのである。このような国際的問題に真正面から取りくむことにより、山崎は、日本の社会派小説家というよりはむしろ、国際的社会派小説家へと変貌したといえよう。

それに加え、敗戦直後、そしてそれ以降も、一部の日本人は、無意識の自己防衛本能により「敗戦」の事実を否認しようとするか、それに直面したがるらないようである。歴史学者の吉田裕（1954-）氏は「戦争体験の継承という面で深い断層が存在した」と指摘している（吉田 2007:230-235）。戦争を体験した山崎がこの体験が風化されず、世々代々継承せねばならないという強い信念の持主であったとあって決して過言ではないだろう。この戦争体験の「種」が激動した内外情勢という「土」の下から芽を出してすくすくと育ち、「戦争三部作」という「大木」になったといえよう。一言で言えば、山崎はかつて毎日新聞記者としての仕事であった「取材」を糧とした、徹底した「取材の鬼」であり、取材の事実-歴史-創作を融合したスケールの大きな作家として大成したといえよう。

参考文献

- 保阪正康（2011）「シベリア抑留から生還した黒幕「瀬島龍三」がフラれた「寂光院の女」『週刊新潮』56（8）:46-48.
- 茨木市立中央図書館併設・富士正晴記念館（2002）『富士正晴資料整理報告書 第10集 富士正晴文学アルバム』茨木:富士正晴記念館.
- 家永三郎（編）（1976）『昭和の戦後史 第五巻 激動と変革』東京:汐文社.
- 井上靖（2000）『井上靖全集 別巻』東京:新潮社.
- 入江昭（2000）『二十世紀の戦争と平和 [増補版]』東京:東京大学出版会.
- 権田萬治（2005）「解説」山崎豊子『山崎豊子全集 18 二つの祖国（三）』東京:新潮社:533-537.

- 野口悠紀雄 (2010) 『1940年体制(増補版)』東京:東洋経済新報社.
- 野上孝子 (2015) 「山崎豊子が出会った三百人の「大地の子」」『文芸春秋』93 (11) :158-164.
- 岡部一明 (1991) 『日系アメリカ人強制収容から戦後補償へ』東京:岩波書店.
- 大澤真幸 (2017) 「山崎豊子の「男」」『波』51 (1) :78-85.
- (2017) 『山崎豊子と「男」たち』東京:新潮社.
- 李瑞華 (2019) 「山崎豊子から富士正晴への書簡等 (1950年—1969年) について」『東アジア文化交渉研究』12:503-537.
- 新潮社山崎プロジェクト室 (編) (2015) 『山崎豊子・スペシャル・ガイドブック』東京:新潮社.
- 陶徳民 (2012) 「作為“人学”的東亜文化交渉学:基于史学立場的一个倡言」『東アジア文化交渉研究』5:3-9.
- 山口誠 (2010) 『ニッポンの海外旅行:若者と観光メディアの50年史』東京:筑摩書房.
- 山崎豊子 (1983) 『不毛地帯 (一)』東京:新潮文庫.
- (1983) 『不毛地帯 (二)』東京:新潮文庫.
- (2009) 『不毛地帯 (四)』東京:新潮文庫.
- ・竹内実・岡崎栄 (1995) 「「大地の子」ふたたび--二年の歳月をかけたついに甦える日中友好の証」『文芸春秋』73 (17) :278-289.
- (1999) 『『大地の子』と私』東京:文藝春秋.
- (2005) 『山崎豊子全集 13 不毛地帯 (二)』東京:新潮社.
- (2005) 『山崎豊子全集 16・18 二つの祖国 (一) (三)』東京:新潮社.
- (2009) 『山崎豊子 自作を語る 1 作家の使命・私の戦後』東京:新潮社.
- (2012) 『山崎豊子 自作を語る 作品論 作家の使命 私の戦後』東京:新潮社.
- 吉田裕 (2007) 『アジア・太平洋戦争 シリーズ 日本近現代史⑥』東京:岩波書店.

The Consummate Interviewer Engaged with the War Survivors: The Formation of Yamasaki Toyoko's
War Trilogy and its historical background

Abstract: Yamasaki Toyoko (1924-2013), the representative of Japanese social fiction writers, has written *War Trilogy* based on war themes and a wealth of relevant materials collected over a period of about 20 years from the 1970s. It was a shock to the turbulent times of the matter. There seems to be a different way of thinking about the creation or mechanism of this *War Trilogy*. However, it is precisely because of her war experience that Yamasaki, created the *War Trilogy* based on real events and people, and a device that shake the era through thorough interviews. In this period, Yamasaki could be said to be an international novelist of social fiction rather than a Japanese novelist of social fiction. In addition, it is known that Yamasaki studied under the writer Inoue Yasushi, but in fact, another advisor, Huji Masaharu, was a very important figure in his works. In this article, based on previous research, the author of this paper will examine various aspects of Yamasaki's mechanism in the *War Trilogy* and clarify the historical background at the time of writing.

Keywords: Yamasaki Toyoko *War Trilogy* War Memories Fieldwork Experience War Remorse